関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

イングリッシュ・メディア・ラボの現状と課題

著者	高橋 美帆
雑誌名	関西大学視聴覚教育
巻	30
ページ	53-55
発行年	2007-03-31
その他のタイトル	An Approach to English Media Laboratory in LL System
URL	http://hdl.handle.net/10112/12049

イングリッシュ・メディア・ラボの現状と課題

髙橋美帆

2001年度から本年度（2006年度）まで５年間イングリッシュ・メディア・ラボ1a, 1b, 2a, 2b を担当してきた。本年度を最後に担当科目が替わるため、この科目について５年間考えてきたことを本稿で総括したいと思う。

イングリッシュ・メディア・ラボは、新カリキュラム導入期より開講された半期の選択科目である。1a は１年生を対象として前期に開講され、1b はその後期に開講される。同様に、2aは２年生を対象として前期に開講され、2bはその後期に開講される。

はじめに、履修登録についての問題を指摘したい。この科目は、旧カリキュラムでは「実習ＬＬ」の名で通年科目として開講されていた。現在でもイングリッシュ・メディア・ラボ 2a・2b には、旧カリキュラムで登録した過年度の学生の姿が見られる。過年度の学生に関しては、実習費を徴収するという事情もあるためか、自分の時間割に併せて好きなクラスに入れるようである。新カリキュラムの学生については実習費は発生しないものの、クラスサイズおよびＬＬ教室の収容人数に限度があるため、希望人数によっては受講登録の前に抽選が行われる場合がある。少ないデータとはいえ２クラス・５年分の名簿から判断するに、大部分の学生は前期・後期と「セット」で登録する傾向が見られる。すなわち、前期と後期を同じ時間、同じ担当者で登録しようとする学生が多いのである。しかしながら、抽選に漏れたり、あるいは時間割の関係上半期しか履修登録できない学生もいる。そうした学生のなかには、前期の授業が終わった時点で、「登録できなかったが、もし席が空いていれば、単位は関係なく後期も続けて授業を受けさせてほしい」と申し出る者もいる。教務的には受け入れるべきではないのかもしれないが、教育的には受け入れたいと思うのが担当者としては正直なところである。旧カリキュラムで通年登録している過年度生のなかには、名簿に名前があって座席も１年間確保されながら一度も現れない者もいる。そうした学生の席は、事実上空いている。他の学生たちもそれをわかっている。どうしたものか ―。年を追うごとに旧カリキュラムの学生数は減り、こうした問題もなくなってはきたが、連続して同じ担当者の授業を受講したいという学生の希望は叶えられないものだろうか。

次に、履修登録の問題と絡めて、セメスター制におけるこの科目の現状について触れたい。学生のリスニング・スピーキング力の到達を毎回確認し、かつ個々の学生の資質を見極めて適切な指導をするのは、半期だけではなかなか困難である。イングリッシュ・メディア・ラボを担当した初年度には、セメスター制を非常に意識して、半期で終えられる教材を選びシラバスを作成した。その年の後期になって、前期のクラスと後期のクラスがほとんど同じ顔ぶれであることに気づいた。この傾向がわかってからは、単位の上では前期・後期に分かれていても、各学期で使用する教材に一連の到達目標を設定して、１年間

をひとつの目安として学生の上達を目指している。１年間のみならず２年間継続して同じ担当者の授業を受講する学生も少なくはない。その場合は２年間かけて学生を指導できるため、担当者としても情報量が多いだけに指導しやすく、お互いに前の年度から親しんでいる面もあって、授業全体が円滑に進むような気がする。学生アンケートの自由記述にも、受講登録の際仮に抽選があった場合、前期に登録している学生が優先的に後期に同じ担当者の授業を登録できるようなシステムになればいいのに、という声もあった。もちろん一方で、さまざまな担当者のもとでいろいろな授業を受けてみたいと思う学生にとっては、半期で終わる制度は魅力あるものといえるだろう。

また、学生アンケートの自由記述を読むたびに思うのが、クラスのレベル設定についてである。半期で十分な効果を挙げるのを目標とするなら、習熟度別にはできないものだろうか。「力がついた」「受講してよかった」という声があれば、「難しかった」というため息交じりの声もあり、一方では「簡単だった。もっとレベルを上げてほしい」という声もある。たとえばクラスの習熟度が一定であれば、こうした不満の声は減少するはずである。

さて次に、筆者の授業内容を紹介し、この科目の現状の一例として挙げておきたい。先ほど述べたように、１年間をひとつの目安として学生の上達を目指しつつ、この５年間のイングリッシュ・メディア・ラボではＬＬ教室の特徴を生かしたスピーキング・リスニング重視の授業を試みてきた。イングリッシュ・メディア・ラボ1aでは24の母音と19の子音それぞれについて口の形、発声等、英語発音の基礎を身に付けさせる授業内容を徹底した。ＬＬ教室ではモニターで学生一人一人の発音をチェックできるので、気づいた点について担当者が即座に本人だけに助言でき、効果的であった。人前で話すのが苦手な学生もこのやり方だと安心して発声練習できるようである。イングリッシュ・メディア・ラボ1bでは1aと同様、実際の練習を通して、音の変化（同化、脱落、縮約、連結など）、アクセント、イントネーション、リズムを中心に授業を進めた。前期・後期を通して受講していた学生のなかには、最初は自信のなさそうな小さな声でぼそぼそと発音していたのに、年度末には自信を持って大きくはっきりと発音するようになる者が少なくない。たとえ週１回の練習であっても、授業中のみならず日常生活においても英語の発音に対して意識が高まるという点が、この授業の最も効果的な面だと思われる。授業後の休憩時間には、学生たちから「他の授業で友達に『英語の発音がきれいになった』と言われるようになった」、「英語を話す機会を増やそうと意識して、道に迷っている外国人観光客に話しかけることができた」など、積極的なコメントが担当者に寄せられる。同じ内容のコメントは授業アンケートの自由記述の際も寄せられ、そうした内容は毎年必ず共通して見られることからも、授業の効果が広く学生の日常生活に反映されているものと思われる。

イングリッシュ・メディア・ラボ 2a と 2b では映像教材を基にして、シャドウイングを徹底して、発音の基礎をさらに会話レベルにまで発展させる内容を試みた。とりわけ「チャンク」は学生の興味を惹くようで、他の授業ではあまり取り上げられないという事情もあり、毎回の授業に取り入れてきた。課題のひとつに、映画教材のなかで好きな場面や好きなセリフを選び、場合によっては一人二役を演じ、配役になりきってセリフを読む練習をし、それを録音して提出する、というものがある。初年度から課題として行っている

が、受講者には毎回好評である。確かに、担当者側にとってはイングリッシュ・メディア・ラボ１とあわせると90名ほどの受講者数となり、非常に手間のかかる評価方法ではある。しかし、受講者側にとっては頑張って練習してきたその成果を形にするという課題であり、自分の１年間の総復習ができるのである。毎回全部聴いて評価するのは大変ではあったが、こちらも学生一人一人の顔を思い出しながら最初の授業時からの上達を最終確認できて、意義のある方法だったと思っている。

最後に、こうした課題および授業内容の復習に関連してＬＬ教室という設備の問題を取り上げたい。様々な機能の備わったＣＡＬＬ教室は確かに便利ではあるが、それだけに学生の作業内容をチェックして管理する必要が生じてくる。実習科目であるイングリッシュ・メディア・ラボには、ＬＬ教室のシンプルさがかえってよかったように思われる。唯一困ったのは、ＬＬ教室ではカセットテープしか使えない点である。学生は自宅で復習したいと思ってもカセットテープを再生できる機材を持っていないため、ＭＭＬ室のブースで練習するしかないのである。担当者としてはできるだけこの点を改善すべく、ＣＤ付の教材を選んで自宅でも復習できるように工夫はしていたものの、やはり自分で吹き込んだ声を聞いて自分の癖を直したいと考える学生にとっては、このシステムは不便である。現在のシンプルな機能を維持しながら、カセットテープではなくＭＤが使えるようにはならないものだろうか。

以上、イングリッシュ・メディア・ラボの現状と今後改善すべき点を挙げてきた。この科目には、学生が今以上に授業を効果的に活用できる可能性があると思われる。以上の問題点を踏まえ、今後この科目が一連のコースとしてさらに発展していくことを期待している。